

イベントから始まる地域コミュニティー

はじめに（イベント発案のきっかけ）

山里にある全戸 300 戸程の N 地域の中心的存在だった N 小学校が、2010 年に閉校になった。

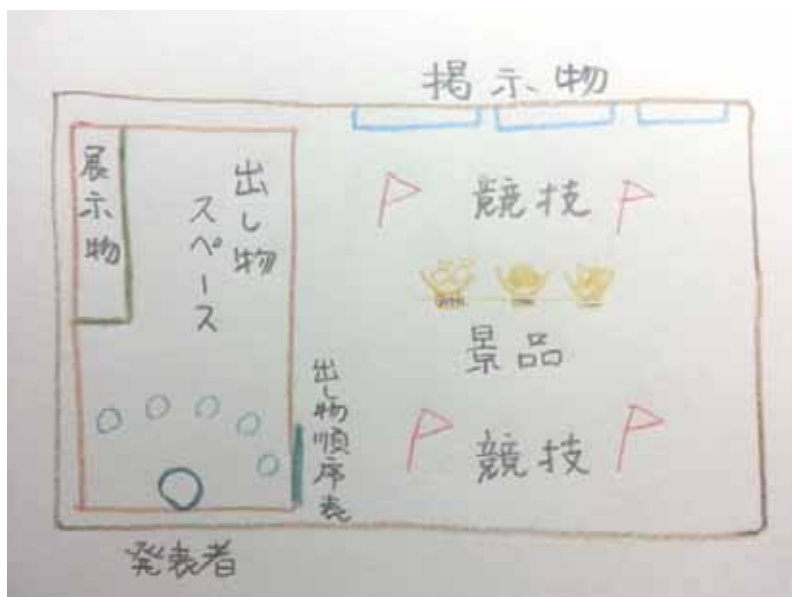
N 小学校の運動会では全校生徒が少ないので地域の運動会も合体したような形式だった。小学生、卒業した中学生、高校生、地域の人...みんなで盛り上げた素晴らしい運動会だった。

それに代わるものとして、(旧) N 小学校体育館での地域のイベントが企画された。

それは老若男女みんなのできるスポーツをメインにしたものだった。

地域の温かみがにじみ出た盛会となったが、会長挨拶の「来年はもっと色々な年齢層で多数の参加を目指したい...」を聞き、小学生・中学生・高校生・若い人...にも魅力のあるイベントということについて考えてみようと思った。

イベントへの提案



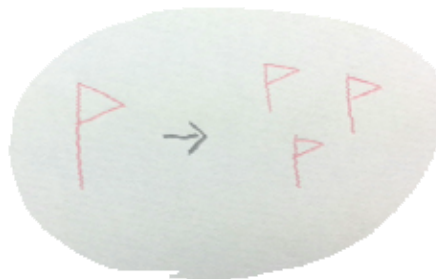
1. 競技の多様化

メインの競技があってもいいが他にも競技できるものを増やす。

子ども・高齢者でもできるもの、元気な中学生や高校生に人気のあるもの…。

みんなで一つのことを楽しむのもいいが、それぞれの能力に応じた好きな競技を選べるのは魅力。

その競技が好きな小さな集団で盛り上がって、そんな競技がいくつかあってひとつの空間を作っている。競技参加はしないけど観戦するだけという人も居ていいと思う。



2. 出し物も出せる

運動会だけではなく、文化祭もいっしょにやってはどうだろうか。

といっても、主催者が準備するのが大変なことはなるべくしない。

主催者が企画したものを参加者が…というのではなく、何かやりたい人が出し物を自由に企画して発表する。

企画する楽しみを主催者のものとせず、個人に譲る。

その場に集まった発表者がその場で順番を決めてやる。

出し物スペースはステージの上で、発表者も見る人もステージの上。

趣味や得意なことを緊張せず発表できる場を作る。

ステージに展示物のコーナーも作っておく。当日それぞれが持ってきて置いて、持って帰る。

7°プログラム		
1.	吉四六話	10分 長田二子
2.	手品	5分 長田三男

3 . 景品をつける

競技も出し物も景品がもらえるようにしたらどうだろう。

競技のルールや景品については集まった人で決める。



4 . 景品を個人が出せる

景品をもらう楽しみもあれば、あげる楽しみもあっていいのではないだろうか。

サツマイモ、漬物、クッキー...出した人が分かるようにラベルをつけると話が広がるのでは。

5 . 掲示物を出せる

美しい風景や小さな自然のキラめく一瞬、自慢のペットや作物、孫などの写真や、書、絵...を当日に自分で掲示する。

当日参加できない人も参加する人に預けて掲示できる。

字を書くのが苦手な人や写真は家族の人をお願いなどして家族間コミュニケーションの種になるかもしれない。

1戸に1枚ではなく家族全員でも1人何枚でも。

お互いの情報交換、話題提供の場ができる。

.....イベント後.....

これは、このまま残しておいて他の行事のときも見るようにしておく。

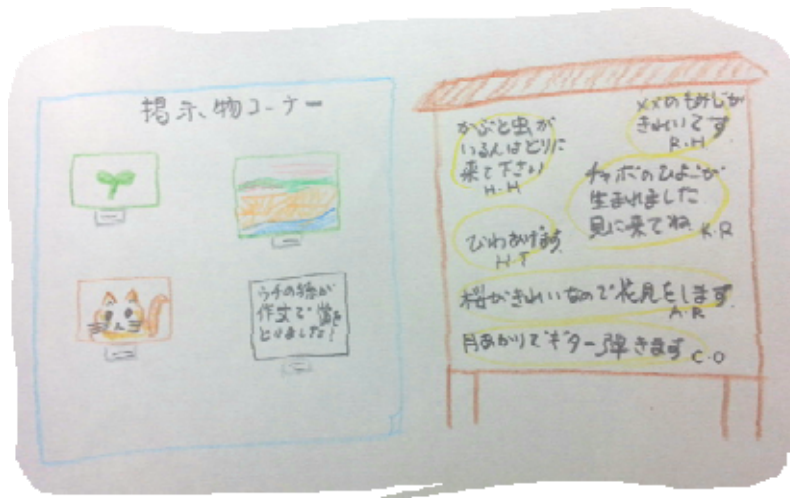
そしてそのつど自分で更新が可能。(N地域限定まちなかFB?)

見ること、更新することが楽しみで各行事の参加者が増えることも期待できる。

もう少し広げて「今」の情報をN地域メインストリートにある「掲示板」でシェアもいい。

もっと広げて無人販売所なんかも...

メールで投稿、携帯でチェックできるようにする手もある。



6. チラシにラベルを掲載する（広報について）

全戸配布のチラシには裏面に「景品出品」「出し物」「展示物」「掲示物」のためのラベルを印刷。

それに書いて、当日を楽しみに待つ。

主催者はイベント内容の広報はしっかりするが参加の強制はしない。

本当に参加したい人が集まって小さい会でも盛り上がれば、その様子を広報してだんだん参加者が増えていけばよしとする。



イベントのねらい

- ・ 競技を選べる楽しみ
- ・ 出し物を企画する楽しみ
- ・ 景品をもらう楽しみ
- ・ 景品をあげる楽しみ
- ・ 情報交換、話題提供
- ・ チラシで楽しみに待つ

以上をねらいとした案だったが、このねらいの意味をもっと掘り下げてみたい。

1 . まず知ること

ここにはこんな面白い人、スゴイ人、変な人がいるんだなあ。

こんな面白いもの、スゴイ物、変なものがあるんだなあ。

知らなければ好きになりようがない。

この美しい里山の風景を共有している人たちで、お互いを、人を、自然を知ること、興味を持つこと...

そんなきっかけになるイベントを目指した。

2 . 1対1（個と個）から生まれるコミュニティー

地元の人同士、もともと知らない仲間じゃないけど時間の経過と共に興味は移ろう。

若い人、子どもたち、地区外から来た人にとっては新鮮な情報も多いはず。

同じ興味を持つ人が発見できて語り合える。そんな小さなコミュニティーの集まりで大きなコミュニティーを支えることができると思う。

3 . 主催者が頑張らない

主催者が頑張るのではなく、参加者が盛り上げていくイベントを目指したい。

自分で企画できるというワクワク感・楽しみは、実は魅力的。

初めは参加者が少なくても、面白そうだからと、だんだんと参加者が増えていくなら大成功。

4. イベントで種蒔き

イベント時だけで終わりではなく、その後につながることの種を、お互いがたくさん蒔いておくことができたらいいと思う。

まち(むら)づくりでの3つの方向性

地域のイベントの内容を考えようとしたとき、自分でも意識なく「まち(むら)づくりでの理想」を考えていることに気づいた。

それを3つの方向性としてまとめてみる。

1、単から多へ(多様化)

一つのことをみんなでやろうというのはシンプルで管理しやすい。

でも人はそれぞれに得意、不得意、好き、嫌い、の個性を持っている。

その個性を認め合い生かし合うための多様化を可とすれば、軽い気持ちになれる。

単一ブランドではなく多種多様のブランドが生まれる可能性も望める。



2、上からでなく下から

「まちづくり」「高齢化」を行政がなんとかしてくれると、どこかで期待してはいないだろうか。

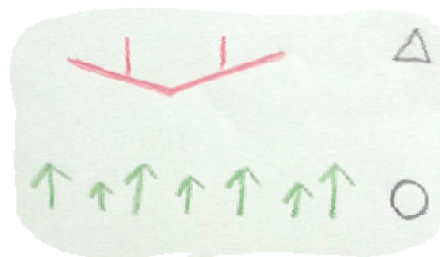
受身的な姿勢では生まれないこともある。

一人一人の自発性を刺激するため、主催者があえて細かいお膳立てをしない...というの小さな単位ではありではないだろうか。

その時その場に合わせて柔軟に企画変更ありで、その瞬間を同じ場を共有する仲間と味わ

うことをひとつの目標とすること...なんてどうだろう。

下からの盛り上がり、そんな自発性は発展してお互いを気にかけることにも繋がっていくのではなかろうか。



3、内から外へ

まず自分の今に誇りを持つことから始まり、それをお互いに知ることによって、まち全体の誇りになる。

誇りは魅力となり外からも注目されるようになるだろう。

「まち(むら)なか FB」なら外への発信もスムーズにいくことと思う。

豊かな自然の上にそこに暮らす人たちの笑顔が加われば、この上ない土地の豊かさを提供できるだろう。



おわりに

FB(フェイスブック)で世界とつながるのもいい。

でもここで考えてみよう。

地域でのつながりは、同じ風景、同じ気候を共有している仲間とシェアできて、会おうとすればすぐに会える。

それ見たい! それやりたい! と思ったとき、現実化がはやい。

つまりそれは2次元ではなく3次元でシェアできるということ。

そんな優れた点がある。

育つ上で色々な実体験が必要な子どもたちにとっては、特にありがたい情報となるだろう。そして万一何事が起こったとき、より役立つのがどちらかは明白だろう。

7年前にこの地に引っ越してきて大変温かく迎え入れてもらった。自然環境も人のつながりも世界一いいところだと感じた。

人数が少ない小学校では助け合い精神がなければ運営できない。PTAでの集まりが多くてたいへんだっただけ、そのおかげですんなり溶け込むことができた。閉校が決まったとき親子とも身がきられる思いがした。その後、自分の一部にぽっかり穴が開いた気がしたのは私だけだろうか。

それほど急激な変化ではなく徐々にであったが、同じことが地域コミュニティーでもあったのだろう。

機械化が進んだなどの理由で「共助」の必要性が薄れてしまい、それを元に戻すことは難しい。

しかし、新しい価値に気づくことはできるはず。

地域の防災、福祉、文化、観光もコミュニティーの基盤の上にあるなら、より堅固なものとなるだろう。